

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニュース

No.26
WINTER 2012



江戸図屏風（国立歴史民俗博物館蔵）

目次

●メッセージ

「鶴飼文庫」資料の寄贈－鶴飼重行氏に聞く・資料紹介－	1
----------------------------	---

●研究ノート

「江戸名所と風俗画」展の構成意図	井田 太郎	4
研究展望－異国征伐戦記、そして、寄り道	金 時徳	6
罹災文書のレスキューにたずさわって	西村慎太郎	8

●トピックス

第35回国際日本文学研究集会	陳 捷	10
コロンビア大学国際シンポジウム		
「日本の視覚文化－芸能・メディア・テクスト－」	恋田 知子	11
イギリスEAJRS研究集会	神作 研一	12
イタリアとの日本文学国際共同研究集会	山下 則子	13
総合研究大学院大学 平成23年度入試説明会と特別講義		14

「鵜飼文庫」資料の寄贈－鵜飼重行氏に聞く・資料紹介－

鵜飼郁次郎（1855～1901）が明治期に収集した「鵜飼文庫」（新潟県佐渡市）は、規模の大きな個人蔵書として平成9年度以来当館の調査対象となっていたが、このほど、当主鵜飼重行氏から書籍資料1,433点及び文書資料約4,500点を一括ご寄贈いただいた。本文庫は、国文学に留まらず、明治期の憲政史また佐渡の地方史など、多方面からの関心にこたえる優れた内容を持っている。受け入れの一段落した平成23年11月14日、鵜飼氏を当館にお招きしてお話をうかがい、また、国文学関係資料としてきわめて貴重な『蜻蛉日記』の古写本及び歴史資料の概要について、広くご紹介することにした。

鵜飼重行氏に聞く



鵜飼郁次郎肖像写真

－今回の受贈を記念して、「鵜飼文庫」についてお話をうかがいたいと思います。まず、創設者の鵜飼郁次郎の生い立ちと業績について、よろしく願いいたします（なお、以下の人名については、歴史上の人物として敬称を省きます）。

▶鵜飼 鵜飼郁次郎は、安政2年（1855）に佐渡に生まれ、鵜飼家には養子として入

りました（本姓は羽生）。私塾で和漢の学を学んだ後、新潟師範学校に入学し、教員となりますが、30歳の時に県会議員、35歳で第一期衆議院議員（自由党系）に当選しました。40歳過ぎまで政治活動に専念し、その後健康を害して、明治34年（1901）、46歳で亡くなります。晩年「萬花楼」と号して、奇書珍籍や郷土資料の収集につとめたようです。

－政治家としての郁次郎についてはいかがでしょう。

▶鵜飼 35歳で国会議員というのはすごい若さですが、あの当時の人ですから、やっぱり何か燃えるところがあったんでしょうね。今回寄贈した中にある『日本憲政の確立と鵜飼郁次郎』（昭和15年、原稿用紙ペン書き）という資料を読んできましたが、国会開設前の、あの時代の激動する世の中が感じられますね。それから、交友録とか、卷子本七巻に仕立てられた郁次郎宛の書簡集を見ても、ほぼ七割ぐらいを占めているのは地方出身の代議士で、そういう人たちとの交流がたくさんあったことが分かります。

－郁次郎の収集のきっかけについてうかがいます。

▶鵜飼 いやあ、これは分かりませんね。現役をリタイアしてから、書物や色々なもののコレクションに、かなり精通したというようなことが伝えられていますが、実父が俳諧をたしなんだりする環境だったのに加えて、好奇心が強く勉強家だったんじゃないかなというのが私の推測です。文学のほうの資料は、彼がどこまで内容を理解していたかどうかというのはちょっと分からないところもありますけれども、自分の仕事に関係するものも入っていますから、学究肌の人だったというのは間違いないと思うんですけどもね。

－文庫を維持・保存してこられるにあたってのご苦労についてお話しいただけますか。

▶鵜飼 郁次郎が亡くなってから、文庫の保存に功績のあった人は、五人いると考えています。

一人目は小池龍蔵で、もともと鵜飼の家とどういう関係があったのか分からないのですが、郁次郎の生前から、この人を信用してすべてを任せていた。文庫の目録は、改訂を重ねて現在きちんとまとまっていますが、早い頃の目録に残された書き入れから、整理したのは小池龍蔵だったことが分かります。なお、大正15年（1926）に火災で家が焼けて蔵だけが残りますが、この時に龍蔵は57歳か58歳です。

火事の後、鵜飼の本家は東京に移りますが、文庫を守った二・三人目は、分家の鵜飼常吉と息子の角次です。小池龍蔵が年をとった後は、この方がその後ずっと、第二次大戦の後ぐらいまで面倒を見てくれました。四人目は、角次の息子正太郎です。この方は戦争から引き揚げてきて、それからずっとおられて、ついこの間亡くなったんですけども、文庫の整理を手伝っていただきました。

五人目は、私の祖母にあたる千代です。第二次大戦中、祖母・母・姉・私で東京から佐渡に疎開して（祖父は亡くなっ

ていました)、戦後我々は東京に戻ったのですが、千代だけ佐渡に残って、80年代の初めぐらいまでずっと一人でいました。文庫は、千代が虫干ししたりして、正太郎がそれを支えたわけです。

その間、昭和51年(1976)に、両津市(現佐渡市)と文庫の管理契約を交わして、本を蔵に置いたまま一般に展示できるようにしました。その時、管理人が要るだろうというので、正太郎がなっていたんですね。そういう経緯です。千代は、昭和62年(1987)に亡くなりました。

—「鶴飼文庫」という名前がついたのはいつごろですか。

▶鶴飼 あれはね、私が知っている限りでは、ずっと「鶴飼文庫」と言っているんですけども、郁次郎が存命している時には「住吉文庫」とか言っていたようですね。それを「鶴飼文庫」という名前に変えてきていますので、郁次郎の合意はありますか、分かりません。小池龍蔵が名づけたのかもしれませんが、そこまで深く考えたこともありませんでしたけれどもね。(笑)

—今のような立派な本箱(桐・檜)に入れられるようになったのは、いつごろでしょうか。

▶鶴飼 それも分かりませんね。だけど文庫として、それこそ「鶴飼文庫」と名をつけた時ぐらいに、まとめて整理したということですかね。もちろん、小池龍蔵の時(明治40年頃)じゃないかと思いますがね。

—鶴飼さんの代になられてから、保存のために蔵を建て替えたり、色々ご努力があったと思います。ご自分のことはなかなかおっしゃりにくいかもしれませんが、よろしく願いいたします。

▶鶴飼 もともとは、米蔵が三つくっついていてね。長ったらしい蔵で、それがかなり痛んできたので、私が一つにまとめました。そのときに国文研のほうの寄贈が決まっておれば、もうちょっと手を抜いたんですけども。(笑)ところが、改修した上にセメントで張り直すと湿気と呼ぶという問題もあったんですね。ですから、屏風類なんかでも若干カビが出ました。

出来上がってみると、今の蔵(文庫)より昔の蔵の方が、劣化のせいか風通しがよくて、保存する環境としてはかえってよかったのかなと思います。除湿剤や防虫剤を入れたりするようになったのは、90年代以降のことです。私の祖母



感謝状贈呈(左:鶴飼氏 右:館長)

(千代)が、座敷いっぱい広げてやっていたように、風を入れて虫干しするぐらいのことで対処するのが保管上はよかったのかなと思いますけれどもね。

—国文研への寄贈に至る経緯についてお尋ねします。

▶鶴飼 平成9年に管理人(正太郎)と私の両方に国文研から調査の打診があり、平成10年の3月に第一回の調査が始まりました。それから、東京学芸大学の嶋中道則先生と新潟大学の鈴木孝庸先生・広部俊也先生を中心に、10年以上続いたわけですね。

一方私の中では、一体あの文庫をどうしたものか、というのがもう前から課題になっていまして、佐渡の方に置くことも考えたのですが、全体を国文研で引き取ることが可能ということが分かって、私どもの家内会議と言いますか、母も含めて意見が一致したので、それじゃ、ということで。

—最後に、国文研での管理と公開、それから、利用して下さる方たちに対する期待についてお願いします。

▶鶴飼 やっぱ、より多くの方々に活用していただければという一言に尽きますが、佐渡関係の郷土史・佐渡叢書といったところも国文研に収まることが、若干引っかかっています。国文研が大きな受け皿になってくださるわけだけでも、佐渡と国文研の間で連絡を密にして、情報の共有ができるようにしてほしい。そうなるように、国文研から佐渡へのPRを心がけていただければ、もうこの上ないことだと思います。

—本日はどうもありがとうございました。

(文責:大高洋司)

資料紹介

『蜻蛉日記』(阿波国文庫旧蔵)

『源氏物語』や『伊勢物語』など、鎌倉時代の古写本が残る著名な作品に対して、『蜻蛉日記』には古写本が伝わらない。『枕草子』や『紫式部日記』なども同様。そのような作品の場合、よるべき本文は近世初期の写本しかない。

『蜻蛉日記』は、従来、宮内庁書陵部蔵の桂宮本が、多くの注釈、校注書の底本に採用されてきたが、他にも無視できない写本が数本伝存する。そのうちの最有力伝本が、鶴飼文庫に蔵されてきた阿波国文庫旧蔵の一本である。

本書については、昭和34年、「国語と国文学」誌上に山田清市氏による詳しい紹介が載り、『蜻蛉日記全注釈』の著者柿本奨氏も鶴飼文庫を訪れ披見したという。しかし、昭和52年に山田氏によって上巻の影印本が出版されたものの、その全貌はいまだ公開されたことはない。

紹介者山田氏によれば、本書は桂宮本の上に立つ最善本、柿本氏によれば、桂宮本に次ぐ善本と、その評価には微妙な相違があるとはいえ、いまだに本文の揺れなしとしない『蜻蛉日記』の本文校訂には、欠かすことの出来ない最有力伝本であることは疑いない。

鶴飼氏からの御寄贈を機に、貴重書として厳重に保管するのはもとより、他方、影印本の制作などにより、本書を広く研究者に提供することが、本館に課せられた使命であろう。(今西祐一郎)



『蜻蛉日記』冒頭部分

文書と記録

鶴飼文庫として典籍の他に、鶴飼家で収蔵されていた文書・記録類の約4,500点も併せてご寄贈いただいた。その年代は、宝永元(1704)年の質地証文を初見に、下限は昭和50年代までのものを含んでいる。同家は、寛政11(1799)年百姓代、慶応3(1867)年組頭の村役を勤め、天保年間には質屋組合行事も勤め、天明7(1787)年から酒造業を営んでいた。また明治の自由民権運動の中心メンバーとして参画し、県議員、衆議院議員を歴任した鶴飼郁次郎の活動に関する資料がまとまっている。現在、目録作成中で、できるだけ早期に閲覧に供する所存である。これら文書・記録類から鶴飼文庫の創始者である郁次郎の生い立ちと、文庫の収集経緯に関わる資料の概要を紹介したい。

郁次郎は、安政2(1855)年、雑太郡竹田村にて羽生甚左衛門の三男として生まれ、村医の林玄達から漢籍を、慶応3(1867)年には圓山冥北の門下に入り和漢書を学ぶ。これ以降同家とは冥北死去後も深いつながりを継続し、師として重要視していたことが窺える(「圓山冥北先生之書翰」として巻子に仕立てている)。明治9(1876)年に新潟師範学校卒業後、明治10年から東京府庁学務課、東京府師範学校6等教師、東京府霊岸島小学校教師などを歴任するも、明治12(1879)年病気で帰島してから、国会開設運動を推進する。明治16(1883)年に鶴飼家の養子に入り、明治18(1885)年には加茂郡県議員、明治23(1890)年には第1回衆議院議員選挙で当選(2回)し、立憲自由党員として欧米と結んだ不平等条約改正等に奔走する。その一方で鶴飼文庫の創設をも企図し、その収集を開始する。郁次郎の交友関係者住所録には、収集に関わった東京の26書籍商が掲出されている。また書籍商からの「はがき」や「書籍受取」(袋一括)などから、収集した書名や金額、さらには収集に至る経緯など具体的様相を把握することができる。書籍商は、二三屋岩本米太郎、浅草朝倉屋吉田久兵衛、南伝馬町有隣堂、下谷区池之端琳琅閣、神田イーグル書房、駒込亀田考古堂、京都三条通出雲寺文次郎、大坂東区書林鹿田静七、本郷亀田一恕、神田区八尾新助、芝区臥龍堂、馬嶋松雨、京都小杉猪吉らである。さらに冥北死去後、圓山家から郁次郎宛の書状(明治27年)には、「…且又頃日相川の噂ニハ貴兄有志諸士ト御協議之上書籍館設立ノ美挙有之由、実ニ吾佐島ノ名譽ト奉候候…」とあり、佐渡で書籍館の設立を有志で意図していたらしいことなど、また蔵書目録には数度に及ぶ蔵書点検や虫干しの記録もあり、文庫の成立だけではなく管理面においても興味深い資料である。(山田哲好)

「江戸名所と風俗画」展の構成意図

井田 太郎 (国文学研究資料館助教)

一 はじめに

今回、今年三月二八日より五月六日まで にわたり、国立歴史民俗博物館との連携展示「都市を描く—京都と江戸—」第Ⅱ部「江戸名所と風俗画」を行う。名所と風俗といえば、都市まるごとを相手にする巨大なテーマである。とはいえ、各種の代表作を並べる展覧会ではないので、どのような意図をこめたのか、視角について贅言したい。以下、太字は出陳予定品である。特に所蔵表記のない作品は、国文学研究資料館の蔵品である。

大田南畝は、^{くわがたけいさい} 鵜形蕙斎「近世職人尽絵巻」上巻（文化元年【一八〇四】、東京国立博物館蔵）¹の巻末に「水いたりて清ければ魚なく、庭いたりてきよければ塵塚なし。納殿なくば、いづこにか物をかくさん。大路に下水の溝なくば、にはたづみに堪ざるべし。…君子あれば小人あり、百工あれば倡優あり」と記した。「都市には光もあれば闇もあり、さまざまな人々がいる。それこそが都市なのだ」と囁いているように感じられる。本展は人でも特に職人にも光をあてつつ、彼等が生活していた都市の景観表現を考えてみようとするものである。それは文学を取り巻く環境を考えるという意味においても重要な作業と思われる。

二 江戸名所の古層

江戸が大都市になった大きな理由は、徳川家康が江戸幕府を開府したからである。家康の江戸入城は天正十八年（一五九〇）。中世の江戸をふりかえれば、太田道灌が江戸城を築城（一四五六一五七）して住んだが、まだ大都市と呼べるものではない。土地をめぐる文化的な記憶の古層にまつわる〈ことば〉の資料には、①『伊勢物語』²、②観世元雅〈隅田川〉³、③「武蔵国浅草寺縁起」、④万里集九『梅花无尽蔵』などがある。開府以前の江戸の都市景観を描いた絵画がないのは大きなポイントである。

こういった中世の流れを受け止め、成立したのが「武州州学十二景図巻」（慶安元年【一六四八】跋、東京都江戸東京博物館蔵）という詩画卷である。林羅山が過去に詠んだ詩を揮毫し、狩野探幽・尚信・安信・益信が画をつがわせたものである。武州州学（昌平黌・昌平坂学問所の前身）からの十二景が主題である。羅山の景物選択は、④などの五山文学に由来しているが、ここで初めて江戸名所が誕生したといっ

てよい。歌枕が武蔵野程度しかなく、富士（駿河国の歌枕）や筑波常陸国の歌枕）を江戸の景物として貪婪に取り込み、〈かたち〉が萌芽していく。

三 都市江戸の鳥瞰と接写

展示室入ってすぐの壁面ケースには「江戸図屏風」（国立歴史民俗博物館蔵、表紙）が立てられる。洛中洛外図のように金の雲で区切って景観を描いた、日本史の教科書でもなじみぶかいものである。近くのケースには浅井了意『江戸名所記』（寛文二年【一六六二】刊、立教大学図書館蔵）・モンタヌス「江戸図」（『日本誌』のうち、寛文十年【一六七〇】刊、図1）などを配し、おなじような時期に上方の人間や外国人が江戸の景観をどうみていたかも同時に示す。

展示替ののちは蕙斎「隅田川春景図屏風」（文政四年【一八二一】、サントリー美術館蔵）・奥原晴湖「墨堤春色図屏風」（明治二十年【一八八七】、古河市指定文化財、古河歴史博物館蔵）が並ぶ。前者は隅田川西岸、後者は東岸の遠望図になっている。江戸の景観表現では、隅田川を中心に左右に富士と筑波を配する型がある⁴が、前者には富士、後者には薄く小さいながら筑波が点じられている。桜の花が咲き乱れる画面を前に、富士筑波の型による景観の構成であることも思いだしていただければ興味深いのではなかろうか。



【図1】「江戸図」

金雲で隔てず、シームレスな鳥瞰図を描き、画期をなしたのは蕙斎である。本展では「異版江戸名所之絵」（文化十四年【一八一七】刊か、図2）を展示した。元の版は享和三年

1 上巻は、摸本である「職人尽絵詞」二（国立国会図書館蔵）を展示。中下巻はオリジナルを展示。

2 嵯峨本（慶長十三年【一六〇八】刊、大東急記念文庫蔵）、整版本を展示。後者は新たに寄贈を受けた鶴岡文庫のもので初公開。

3 光悦翻本の二種（特製本・色替り本、法政大学鴻山文庫蔵）を展示。

4 拙稿「富士筑波という型の成立と展開」（『國華』一三一五、二〇〇五）参照。



【図2】「異版江戸名所之絵」

拠となった⁵。大江戸のイメージと呼ぶうるものである。

ところが大観的に描くとなると、蕙斎の作品に即してみるならば、人物は「江戸一目図屏風」(文化六年【一八〇九】、津山郷土博物館蔵)⁶・「江都名所図会」(天明五年【一七八五】序跋)のごとく小さくなる。ここに点じられた小さな人々を大きく描いたのが、いうなれば「近世職人尽絵巻」で、展示室奥の壁面ケースに展示する。『七十一番職人歌合』以来描かれてきた職人が、蕙斎や同時代の山東京伝『四季交加』(寛政十年【一七九八】刊、個人蔵、図3)、江戸の職人の姿まで転生しているのをみていただく趣向である。カメラを引いた鳥瞰とクロスアップした接写を同時に展示することで、都市江戸を立体的に考えるという構成になっている。基層を確認した上で、大観的な表現、鳥瞰図の成立、鳥瞰図からクロスアップへという流れを組み立てた。



【図3】「四季交加」(個人蔵)

四 百花繚乱から認識の解体へ

江戸名所といって忘れてはならないのは、北斎と広重。広重は「目黒の四季図」(摘水軒記念文化振興財団蔵)という肉筆画、北斎は『絵本隅田川兩岸一覽』(国立歴史民俗博物館蔵)という版本を展示した。通常、江戸名所というと浮世絵をすぐに連想するが、文人画家たちも描いている。『熱闘一趣』(大東急記念文庫蔵)を例に挙げてみる。この書物は京都の医者が江戸に遊びにきたおりに集めた書画を模刻したもので、江戸名所イメージの展開を考えさせるものである。

大きな流れに目を転じると、江戸の景観表現は、定型表現がなかった時代から、色々な型が成立して解体していく時代への推移として眺められる。小木新造氏はその過渡期を東京時代と呼んだが、小林清親<武蔵百景之内>「江戸

(一八〇三)にでて
いる。国内でも蕙
斎以外の絵師によ
る模倣作が多くで
たが、海外ではシー
ボルトの『日本』(嘉
永五年【一八五二】
刊)の挿絵の典

ばしより日本橋の景」(明治十七年【一八八四】、国立国会図書館蔵)などでその雰囲気味わっていただく。かくして定型表現は解体していくのだが、戦前までは江戸時代に形成された型の残像が残っていたことを「地下鉄沿線案内」(東京都江戸東京博物館蔵)で示して終わる。

なお、名所は江戸に止まらず、日本の各地を対象に作られた。『唐土名勝図会稿本』はみたことがないはずの中国、『摂津名勝図会稿本』は摂津国を描く。ともに稿本で、初公開となるものであるので、特記しておこう。こういった名所図会類も参考にして、幕末に滞在したアンペールは『挿絵入り日本』(明治三年【一八七〇】刊)を著わした。海外にまで拡がっていくイメージの源泉でもあったことを指摘する。

五 描かれなかった都市 — 名所の外部 —

都市というと、繁華なイメージがある。現代人の実体験に照らしてみても、二十年ばかり昔、日本の都市はバブルで浮かっていた。しかし、南畝がいうとおり、都市は色んな階層の人がいて一つの有機体をなしているわけである。それこそ一流料亭(たとえば、八百善)からスラムまである。描かれたものばかりからイメージすると江戸は華やかかもしれないが、実体は光もあれば闇もある。こういった都市景観図を展示するばあい、とかく光の面にばかり関心が集まるが、そうではない。パネル展示ではあるが、そういうセクションも設ける。

「火事と喧嘩は江戸の華」といわれるが、江戸は水害も多かった。また、新宿区の小規模寺院の発掘例によると、独り者のしがない男性は投げ込み同然で埋葬されている。珍道中を繰り広げる『東海道中膝栗毛』の弥次・喜多の末路について十返舎一九は触れないが、独り者はこういう運命をたどったのである。小説の外にはこんな現実が広がっていた。描かれ、書かれてきたものは、あらまほしき姿である。その華やかな歴史のもう一方に、こういった現実があったことを忘れてはならない。

景観とは当たり前に〈みえるもの〉ではなくて、〈みるもの〉なのである。文化が造りあげるものといえる。人は都市という社会的な器の中で、希望と現実のはざまを揺れ動いて生きてきた。その状況下、都市のあらまほしき姿を造形してきた。われわれも困難な時代を生きている。これからどういった都市を描き、書いていくのだろうか。

5 岩淵令治「江戸景観図」(『歴博』一七〇、二〇一二刊行予定)参照。

6 本展ではデジタル展示を行う。

研究展望—異国征伐戦記、そして、寄り道

第4回日本古典文学学術賞受賞者 金 時徳 (高麗大学日本研究センター HK 研究教授)

2000年に高麗大学日本古典文学専攻の修士課程に入ってから早10年余が過ぎた。その間の研究成果は拙著『異国征伐戦記の世界－韓半島・琉球列島・蝦夷地』（笠間書院、2010）にまとめられ、筆者の研究はやっと一区切りをつけることとなった。拙著において筆者が追求したテーマは二つである。

一つは、前近代の日本において、日本と異国（もしくは、異郷）との戦争を題材とする戦記とその言説が、どのように製作され、後続する文献に受け継がれたか、また、それぞれ異なる戦争を題材とする諸文献群の間の相互交流の実態はどのようなものだったのかという、いわば系譜学的な問題であった。このテーマを追及するために、①豊臣秀吉の壬辰戦争（壬辰倭乱・丁酉再乱、文禄・慶長の役、など）をテーマとする壬辰戦争文献群（「朝鮮軍記物」とも）、②島津氏による琉球国の征服をテーマとする琉球戦争文献群（「薩琉軍談」とも）、③所謂「神功皇后の三韓征伐」や百済への援軍派遣をテーマとする三韓戦争文献群、④蝦夷・ロシア・日本の三者の間に長期間にわたって展開された紛争をテーマとする蝦夷戦争文献群、の四つの文献群を分析した。この四つの文献群のうち、①の壬辰戦争文献群に関しては、大まかなながらも全体像を提示することができ、①を中心として②③④との相互影響の実態を追及した。しかし、①の場合とは異なり、筆者の研究は、②③④それぞれの文献群の全体像が描ける段階には至っていなかったため、①と②③④との相互影響を追及する作業は不十分なままに終わってしまった。しかも、①と②③との間ではいくつかの直接的な交渉の痕跡が見つかったものの、①と④との間にはそれを見出すことができず、①と④の両方の文献を執筆した作者群の存在を指摘するという、いわば間接証拠を提示する程度に止まった。

もう一つは、異国との戦争をテーマとする文献群に現われる戦争正当化の論理であった。欧米における戦争正当化の論理は「正しい戦争論（Bellum Iustum, Just War Theory）」と呼ばれるが、筆者は、これに相当する東アジアの概念を「征伐」と見なした。拙著では、前近代の東・北アジアにおける征伐概念と戦記の関係を示す好事例として、近世日本で著された四つの異国征伐戦記を取り上げ、日本側の武力行使

がどのような論理で正当化されるかを追跡した。

前近代日本の異国征伐戦記においては、日本による異国への武力行為を正当化するために「攻撃の論理」と「防御・反撃の論理」の二つの論理が持ち出される。「攻撃の論理」とは、異国における淫楽・奸臣・虐政・忘戦・非礼などの「罪」を日本側が道徳的に批判することで、異国への武力使用を正当化する論理である。一方の「防御・反撃の論理」とは、異国からの（予想される）侵略への防御・反撃ということで武力行使を正当化する論理である。

ところで、前近代の東・北アジアで製作された異国征伐戦記には、筆者が拙著のなかで意図的に避けていた、もう一つの戦争正当化の論理が登場する。即ち「文明」が「野蛮」を感化する目的で征伐するという論理である。拙著で分析した四つの異国征伐戦記のうち、この論理が前面に登場するものは蝦夷戦争文献群である。前近代の日本人は、三韓・朝鮮・琉球のことを、日本への朝貢を拒否する非礼・無礼な国であるとは主張しても、文明を知らない野蛮な地域だと見なすことはなかった。しかし、蝦夷地に関しては、文明に感化されていない野蛮な状態に置かれていると見なした。結果、蝦夷戦争文献群に属する多くの戦記においては、源義経に象徴される文明の日本人が、懷柔と武力の両面作戦で野蛮な蝦夷人を感化するという論理が露骨に現われる。そして、日本がいち早く欧米文化の影響を受けた19世紀後期になると、蝦夷人を野蛮と見なしたのと同じような眼差しが、今度は、琉球・台湾・朝鮮・清に向けられることになる。このようなメカニズムは日本に固有なものではなく、東・北アジア、いや、世界全体に見られるものである。拙著を仕上げる段階では、前近代日本の戦記から、文明と野蛮の二項構図による戦争正当化の論理を見出し、整理する作業が不十分だったため、意図的にこの論理に触れることを避けたのである。このような自己反省が、今後の研究への新たな出発点となっている。

これからの研究においては、まず、拙著執筆の段階で不十分なアプローチで終わった蝦夷戦争文献群の全貌を捉え、壬辰戦争文献群との相互影響の実態を究明することを目標とする。文献群の流れを捉え、両文献群の直接的な交

渉を示すと思われる『^{ほっかいだん}北海異談』のような戦記を確認・検討していく作業を続ける。そのためには、近世の東・北アジアで活発に議論された海防論は勿論、北アジアへの漂流と探検による、日本とロシア・清との接触の実態をも検討する必要がある。そのためにはロシア語・満州語の能力が必要であると思い、現在、二つの言語の学習を進めている。ここまでくると、もう、日本古典文学の研究とはいえないかもしれない。しかし、前近代日本の異国征伐戦記が取り扱うテーマを日本古典学の外部から見直すという、一見遠回りに思われるかもしれない作業の末に見えてくる、前近代の日本における異国征伐戦記の全体像が確かめたい。

一方、壬辰戦争文献群は、故・中村幸彦先生が後学に与えられた数多くの課題の中でも、日本人の研究者には抵抗感のあるテーマである。従って、壬辰戦争文献群の研究は、自分に与えられた根本的な課題の一つであると認識している。現在、壬辰戦争文献群やその言説に関しては、中世・近代の二つの方面への拡大を図っている。中世方面へは、壬辰戦争文献群の思想的な前史をなし、異国への日本人のトラウマを決定的なものにした、モンゴル・高麗の日本「征伐」に焦点を当てている。その最初の成果が、百合若大臣^{ゆりわかだいじん}をめぐる文献群に関する拙稿「異国征伐戦記としての百合若大臣文献群―異国戦争挿話の変容を中心として―」（竹林舎刊『中世文学と隣接諸学 - 中世の軍記と歴史叙述』所収）である。一方、近代方面へは、近代期における壬辰戦争文献群の展開を追っている。防衛大学校・井上泰至先生との共著『秀吉の対外戦争：変容する語りとイメージ - 前近代日朝の言説空間 -』（笠間書院、2011）や「太閤記物・朝鮮軍記物の近代・活字化、近代太閤記、再興記 -」（2011年12月3日に青山学院大学で開かれたシンポジウム「日本と〈異国〉の合戦と文学」で発表）などの成果がある。

ここまで、筆者の中期的な研究テーマを述べた。一方、海外で日本古典学を研究する立場から、別の方面で進めている研究が二つある。一つは、韓国の学界に日本文献学の成果を紹介し、韓国・中国の文献学との接点を生み出すことである。韓国には日本文献学の成果が紹介される機会が少なく、韓国の学界における日本の斯界への低評価の原因の一つとなっている現状を、筆者は、韓国に戻って痛感するようになった。このような状況を是正する最初のステップとして、中野三敏先生の『江戸の板本』（岩波書店）を翻訳して

いる。この拙文が公になるまでには出版されていることであろう。ほかにも、文人としての雨森芳洲^{あめのもりほうしゅう}の面貌をあらわす『たはれくさ』をはじめとする、いくつかの主な近世文献の翻訳を計画している。

もう一つは、筆者の個人的な趣味に基づく、「寄り道」と呼ぶに相応しいテーマである。即ち、前近代の日本で量産された大雑書^{おおざっしょ}・暦書・占書の全貌を捉え、また、韓国・中国の雑書と比較研究することである。大雑書類には近世日本の庶民の考えが凝縮されていて、読んでいて素直に面白く、もっと研究されたいいなと思ってきた。一方、日本のように、想像の上で異国と戦うのではなく、実際の対外戦争や内戦が絶えなかった韓半島においては、文献の残存量が少ない。それでも、支配階級に珍重される「上品」な文献は大切に保存され、また、日本をはじめとする海外にも相当な量が流出しているので、その全貌を把握することはそれほど困難ではない。反面、庶民階級にアピールする雑書類は、発生時期や文献群の展開、享受の実態などを確かめることが甚だ困難である。筆者が興味を持つ韓国の雑書は、占書の『^{ダンサジ}唐四柱』、予言書の『^{ジョンガムロク}鄭鑑録』、お正月の初占いに使われる『^{トジョンビゴヨル}土亭秘訣』の、いわば「三大奇書」である。『唐四柱』については、中国・宋代の『^{さんぜそう}三世相』類の中国・日本伝本との比較によって、文献学的にアプローチすることに成功した。その成果は、2010年に慶應義塾大学で開かれた国際シンポジウム「絵入り占本の国際的比較研究」で、「中日の文献との比較による、国立中央図書館蔵『唐四柱』の分析」というタイトルで報告した。その他の雑書に関しても、近世日本の雑書の研究成果を以って、外から攻めていくことにしたい。

尊敬する濱田啓介先生は、留学生の私に二つの教えをくださった。異国征伐戦記の研究に集中していた留学の最中には「朝鮮（韓国）を離れなさい」とのお言葉で、外国人の筆者が、単なる比較研究に埋没することなく、日本古典学の本質を追求するよう励ましてくださった。そして、留学が終わり、拙著の契約が結ばれた頃には、「余裕があれば、近世都市の庶民文化をも勉強しなさい」とのお言葉をくださった。近世日本の文化における「時代」と「世話」の両面への、均衡の取れた研究を促されたものと思っている。筆者がこれから進めていく研究が、先生のお教えに少しでも沿うようなものであるならば、それ以上の喜びはない。

罹災文書のレスキューにたずさわって

西村 慎太郎 (国文学研究資料館准教授)

はじめに

2011年3月11日の東日本大震災では多くの歴史的な遺産が被害を受けた。特に、紙でできた文書の類は津波や火災によって、多くが失われた。歴史的な文書（いわゆる古文書や古典籍など）のみならず、我々の生活にとって不可欠な行政文書も罹災した。

ここでは、筆者をはじめとして多くの方がたと行なった岩手県釜石市の文書レスキュー作業について述べる。このレスキューは2011年度人間文化研究機構連携研究「大規模災害における資料保存の総合的研究」（研究代表者・西村慎太郎）の一環として提案したもので、後に文化庁文化財等レスキューに引き継がれたものである。レスキューのプランニングなどは当館の青木睦准教授によるところが大きく、また国文学研究資料館・全史料協のメンバーも含め、多くの方がたにご協力頂いた。



市役所書庫に押し寄せた津波の爪痕

1. 岩手県釜石市の概要と東日本大震災における被害

最初に今回レスキュー活動に関わった岩手県釜石市についての概要を述べる。釜石市は岩手県南東部、三陸沿岸に位置している。江戸時代は盛岡藩の領内であり、幕末には国内初の洋式高炉の建設、明治維新後の官営釜石製鉄所建設などを経て、製鉄の町として発展していった。1937年に県内で2番目に市制を施行し、1955年には近隣の4ヶ村を合併して、「新」釜石市が成立した。この「新」釜石市成立時の人口は81,109人であり、最盛期の1963年には92,123人まで増加した。これは鉄鋼業の興隆と軌を一にするものと評価できる。以後、人口は減少を続け、2010年末段階で40,056人となっている。

1896年の明治三陸地震、1960年のチリ地震において、釜石は大津波の被害を受けた。その経験から釜石港にお

ける大規模な防波堤の建設が始まり、2008年に完成している。この防波堤は「最も深いところに建設された湾口防波堤 (Deepest Water)」として、ギネス世界記録に認定されている。

この釜石港に隣接して、市街地や繁華街、商業施設が形成されており、少し高台になっているところに市役所庁舎が建設されていた。但し、高台とは言え、わずかに海拔10メートルを超える程度である。

東日本大震災において釜石市内では震度6弱の地震を記録し、最大で9.3メートルの波が襲っている。最も、被害が大きかった鶴住居地区では死者・行方不明者583名、被災住家1,737軒。次いで被害が大きかったのは市の中心である釜石地区で、ここでは死者・行方不明者229名、被災住家1,485軒であった。防波堤は崩壊し、漁港・海岸施設だけで、100億円を超える被害となった。市街地は釜石港に隣接しており、壊滅的な被害を受けた。筆者が震災後初めて釜石を訪れたのは4月26日であったが、市街地は車道を除いて、瓦礫がうず高く積まれている状況であった。

2. 被災状況

次に、釜石市役所の文書類の被災状況について述べる（紙幅の都合上、第一庁舎のみについて述べる）。釜石市の市役所は市の中心部釜石地区に該当する。市役所第一庁舎の海拔は10メートルを超え、後背地には丘が聳える。丘陵地の麓に位置し、庁舎のエントランスへ行くまでに急勾配の坂を上る必要がある。この第一庁舎は中心的な庁舎である（総務企画部など）。

さて、震災後、1階には津波が達することはなかったものの、地下から津波が侵入した（丘陵地の麓に存在する第一庁舎の場合、地下の高さは近隣の住宅や施設の1階とほぼ同じである）。第一庁舎の地下には休憩スペースなどのほかに会計課・市民課などの文書が大量に保管されており、これらについてはすべてが津波の被害を受けることとなった。大量の瓦礫を含んだ津波を受けたため、書架の倒壊などもあったが、引き潮などに流されることはほとんどなく、書庫スペースに水を被った状態で遺された。なお、釜石市の文書管理は分散管理であり、各課で文書を保管・廃棄するシステムになっている。

3. レスキューの計画

次に、釜石市の文書類をいかに救っていくか、その計画

の発端と活動について触れる。4月8日、当館の高橋実教授・青木睦准教授・工藤航平機関研究員とともに被災地を視察し、どのような活動が可能かの検討などを行なった。その後、釜石市の行政文書等の罹災状況を知ることとなり、高橋・青木氏とともに4月25日の夜行バスで釜石へ入った(まだ新幹線は復旧していなかった)。26日早朝釜石に到着し、市職員に文書の被災状況のヒアリングを行なった上で、各課での被災文書を確認し、今後のスキームを検討することとした。27日、釜石市職員に文書のレスキューと保存手当てに関するスキームを提示し、会計課の被災文書を中心にレスキューを行なうことにした。

すでに、震災から1ヶ月半経過していることもあり、各課の文書は市職員の不斷の努力によって、乾燥作業が進められている部分もあったが、既述の第一庁舎地下の書庫に遺された文書はそのままの状態(瓦礫も堆積している状態)で遺されており、レスキューが急務であった。但し、当時は被災した文書は全体的に水に濡れ、泥などの汚れが付着しているものの、カビが発生している状態のものは少なかった(後にはカビが発生するものも確認できた)。これらの本格的なレスキューは5月6日以降進められることとなった。

4. レスキューの方法

次に釜石市で行なった文書レスキューの方法について述べたい。釜石市の文書は各課による分散管理であり、今回の津波によって、書庫内すべての文書が罹災した。作業効率を考えると、①永久に保存する文書、②一定年数保存し、その後に廃棄する文書、③その他と分けて作業するところだが、各課ともに震災後の対応の激務に追われており、文書の選別・廃棄を行なうということは現実的に不可能である。そこで書庫内のすべての文書を保存手当てすることにした。

既述のように書架の倒壊や浸水による瓦礫の堆積などがあり、すべての文書が水と泥によってダメージを受けていた。ただ、ファイルによって綴じられている文書が多く、倒壊した書架にそのまま遺されていたため、どこの部局の文書か、どこに配架されていたかなどの確定は容易であった。そこで、瓦礫を撤去した後、最初に書架ごとに番号を付与し、簡単な現状記録をすることにした(写真と簡易なスケッチ、一棚ごとの簡単な内容)。記録化した書棚の文書は数冊ごとに仮置き場へ搬入した。仮置き場へ搬入する際、どの書棚か、どの棚か、どのまとまりか、が分かるようにそれぞれのまとまりで番号を付し、それを記したA4用紙と一緒に搬入した(透明のビニル袋を利用)。なお、書庫や仮置き場所で保存処置をすることが困難であったため、体制(人

員・道具・場所など)が整った段階で、釜石第一中学校旧校舎4階へ搬入した。搬入後は個々の文書の目録を作成しつつ、乾燥作業を行なった。乾燥作業はキッチンペーパーを用いた。なお、水損文書のレスキューについては多くの研究蓄積があり、それらを参考に青木氏の独自の見解を交えて行なった。

5. 罹災文書のレスキューにたずさわって

最後に岩手県釜石市の文書レスキューから感じたことを述べてみたい。

- ①行政文書を外部の者が保存活動することの可能性を開いた点。個人情報を考えると、なかなか行政文書のレスキュー作業を行なえないものと思われる。今回はスムーズに行なえたが、どの自治体でも同様と言うわけにはいきまい。今後は災害直後からレスキューを行なえるような体制が構築されることが望まれよう。
- ②大規模災害では対応業務が激増し、担当の職員が十分に対応しきれない点。部局の業務増加はもちろんだが、避難所での作業など、担当職員が対応しきれないことが多い。非常時であり、行政文書等の保存が後回しにされてしまった結果、廃棄などを含む甚大なダメージを考えると、外部の専門家が速やかにレスキューを行なう必要がある。
- ③膨大な文書の乾燥作業を行なう場所の確保が困難な点。数千、数万冊に及ぶ文書類の移送は容易ではない。乾燥作業には釜石第一中学校旧校舎4階の大部分を使わせて頂けることとなったが、大規模災害において、このようなスペースを確保することは困難であろう(実際、釜石第一中学校旧体育館は避難所であり、1階は支援物資が保管される場所として利用)。一方で、数千冊を遠距離に運ぶことは現実的に不可能である。
- ④遠隔地であるため現地入りの困難さと作業人数確保が困難である点。交通の遮断により釜石市に入るとは当初からかなり困難であった。夜行バスが開通したことにより、移動できることとなったが、長期滞在の宿泊場所の確保など問題が多い。実際、筆者は釜石において宿泊地が確保できない場合、鉄道で2時間かけて花巻より通わざるを得なかった。
- ⑤レスキュー後の資料の保存と防災を継続的に考えていく必要があるという点。この点については、拙稿「地域に遺された歴史資料」を保存すること(『日本史研究』590号、2011年10月)で詳述したため割愛するが、いま、最も必要を感じているのはこの点であることを強調したい。

第 35 回国際日本文学研究集会

平成 23 年 11 月 26 日(土)～27 日(日)、第 35 回国際日本文学研究集会が国文学研究資料館において開催されました。二日間に渡る研究集会において、国内外の応募より選出された 11 名の研究発表、7 名のショートセッション発表、8 名のポスターセッション発表の、計 26 名による発表がなされました。二日目の最後には、現在国文学研究資料館外国人研究員として日本に滞在中の韓国明知大学校教授、崔京国氏による「江戸戯作における『展示型見立て』—開帳・見世物を模倣したイメージの展覧会—」と題する公開講演が行われています。

国際日本文学研究集会は、国文学研究資料館の主催によるもので、日本文学研究の国際的な発展を目的とし、昭和 52 年から毎年秋に開催されている長い歴史を有するイベントです。今年のテーマは「〈場所〉の記憶—テキストと空間—」で、国内外から 132 人の参加者が集まりました。その中には海外及び国内に在住の 9 ヶ国の外国人研究者計 41 人が含まれています。発表者は集会のテーマをめぐってさまざまな角度から研究成果を発表し、質疑応答も活発に行われ、出席者に多くの刺激を与えました。

第 35 回国際日本文学研究集会における研究発表の全文及びショートセッション発表の要旨、ポスターセッションのテーマを収録した会議録は平成 24 年 3 月に国文学研究資料館より出版される予定で、会議プログラム及び要旨集(日本語・英語)の PDF 版は、国文学研究資料館の web で、御覧いただければ幸いです。

(http://www.nijl.ac.jp/pages/event/symposium/2011/japanese_literature.html)

なお、第 36 回国際日本文学研究集会は平成 24 年 11 月 17 日(土)～18 日(日)に「再生の文学—日本文学は何を発信できるか—」というテーマで開催される予定です。平成 24 年 4 月下旬から研究発表を募集しますので、詳しくは 4 月に当館のホームページを御覧いただくよう、お願い申し上げます。(陳 捷)



研究発表



ショートセッション



ポスターセッション



講演

コロンビア大学国際シンポジウム「日本の視覚文化—芸能・メディア・テキスト—」

近年、文学研究はテキストの分析だけでなく、図像や宗教儀礼、メディアなど、多様な観点による学際的かつ総合的な研究へと広がりを見せています。そうした研究状況を踏まえ、国文学研究資料館では、2009年度より進行中の「スパンサー・コレクション 絵入り本解題目録作成のための総合的調査研究」（科学研究費・基盤研究（A））と2010年より実施の特定研究「在米絵入り本の総合研究」とを連動させ、アメリカに渡り所蔵されている絵入り本について、国内外の諸分野の研究者が集い、精力的な調査研究を進めてきました。その成果の一端として、2011年9月16・17日の2日間にわたり、コロンビア大学で開催されたのが、国際シンポジウム「日本の視覚文化—芸能・メディア・テキスト—」です。本シンポジウムは国文学研究資料館と学術交流協定を締結しているコロンビア大学との共同主催によるもので、2日間のプログラムは以下のとおりです。

9月16日（金）

基調講演 ハルオ・シラネ（コロンビア大学）「中世から近世にかけての日本の視覚文化の変動」

【第1部】異界・異類の文学—説話から絵巻物へ

Session 1

1. 小峯和明（立教大学）「竜宮をさぐる—異界の形象」
2. 齋藤真麻理（国文学研究資料館）「異類物と絵画表現—神仏の使者の物語」
3. ケラー・キンブロー（コロラド大学）「『酒吞童子』絵巻の置き捨て死体と江戸初期の「不浄観」思想」

ディスカッサント：ベルナル・フォル（コロンビア大学）

Session 2

4. マックス・モーマン（コロンビア大学）「悪鬼とエロティシズム—日本仏教の想像力における女の島」
5. 徳田和夫（学習院女子大学）「妖怪の形象—お伽草子絵巻における達成—」

ディスカッサント：マイケル・コモ（コロンビア大学）

【第2部】名所と文化の時空

Session 3

6. 高岸輝（東京工業大学）「交差する縁起と仏画」
7. マシュー・マッケルウェイ（コロンビア大学）「豊国社前の「猿楽之能」—新出八曲本《洛中洛外図屏風》における豊臣追悼の一点景」

ディスカッサント：シネード・キョウ（メトロポリタン美術館）

Session 4

8. 迫村知子（スワースモア大学）「花見・歌・表象：テキストとイメージによる吉野像」
9. 鈴木淳（国文学研究資料館）「北斎画『東遊』におけるイメージとテキスト」

ディスカッサント：ロバート・ゴリー（コロンビア大学）

9月17日（土）

基調講演 今西祐一郎（国文学研究資料館）「絵入り本と文字」

【第3部】王朝文化の再生—絵巻から江戸の視覚文化まで

Session 5

10. 寺島恒世（国文学研究資料館）「歌人の絵姿—歌仙絵の成立と展開—」
11. 石川透（慶応義塾大学）「源氏絵・奈良絵本にみる王朝文化」

ディスカッサント：ジョシュア・モストウ（コロンビア大学）

Session 6

12. メリッサ・マコーミック（ハーバード大学）「『菊の精物語』における花の擬人化と皇統の再生について」
13. アンドリュー・M・ワツキー（プリンストン大学）「16世紀日本における茶の湯の道具と和歌について」

ディスカッサント：ジョン・カーペンター（メトロポリタン美術館）

【第4部】芸能と絵画—いくさがたりと女性—

Session 7

14. 小林健二（国文学研究資料館）「絵画化された語り物の世界—「武文屏風」をめぐって—」
15. 鈴木博子（帝塚山大学）「時代浄瑠璃の女性登場人物」
16. ロベルタ・ストリッポリ（ニューヨーク州立大学）「無伴奏の歌、拍子無しの舞：近代の巻物と絵本に表現された白拍子」

ディスカッサント：渡辺雅子（メトロポリタン美術館）



共同研究から浮かび上がってきた4つのテーマに焦点を当て、動物や異形等の異界の位置づけと宗教観との交わり、中世から近世における王朝文化の再生とその多様な役割、名所と文化的な地勢、軍記物語を素材とする芸能と絵画の関わりなど、各テーマの問題が有機的に関わり合い、多くの成果があげられました。パネリストとフロアの間でも活発な議論がなされ、さらなる問題意識を投げかけつつ、盛況のうちにシンポジウムを終えることが出来ました。参加者は2日間であわせて100名を超え、日本・アメリカだけでなく、カナダやイギリスなどの日本文学・歴史・美術史の研究者や、一般の美術愛好家の方たちなど、数多くご来聴くださいました。会場校コロンビア大学のハルオ・シラネ先生をはじめとする諸先生方、院生の方々のご尽力により、充実したシンポジウムとなりました。

なお、本シンポジウムの成果は、2012年度に公刊される予定です。シンポジウムでの議論を踏まえた、日米諸分野の研究者による最先端の研究成果をお届けいたします。（恋田知子）

イギリスEAJRS研究集会

EAJRSというのはEuropean Association of Japanese Resource Specialistsの略で、「欧州日本資料専門家会議」の謂いです。会長は、ルーバンカトリック大学（ベルギー）のW＝バンドワラ教授。欧州において日本文献（古典籍や浮世絵・摺りものを含む日本語文献万般）を扱う司書・学芸員・研究者等を中心に構成され、毎秋、ヨーロッパ各都市の大学の輪番制で年次大会が開かれています。今年第21回めの大会は、イギリス北東部のニューカッスル大学で、2011年9月7日から10日にかけて開催されました。世話人は同大学のラウラ＝モレッティ准教授。

ニューカッスルは北部イングランド最大の都市で、かつては造船業で賑わいました。今も町の一部に中世（オールドカッスル）の風情が残る、好ましいところです。

さて大会には、10余か国にわたる70名余りが参加しました。基調講演は誠心堂書店主橋口侯之介氏による「江戸時代の出版事情から見た和本調査について」。近年、『和本入門』（正統、平凡社）や『和本への招待』（角川学芸出版）などを矢継ぎ早に刊行して、和本のイロハを楽しくわかりやすく説いている氏ならではの軽快な語り口に、フロア全体が引き込まれたのはたいへんに印象深いものでした。

わたくしは、増井ゆう子司書と金田房子プロジェクト研究員とともに3人で、研究発表「国文学研究資料館の和古書—新分類表の適用—」を行い、当館に所蔵される和古書の概要とその分類に関する中間報告をしました。デジタル化に関わる問題など、フロアからは多岐にわたる要望が寄せられて、一同、当館への大きな期待を肌で感じました。

研究発表はほかに、大内英範氏（東京大学史料編纂所）の「史料編纂所の公開DBとデジタルアーカイブ」、長島弘明氏（東京大学）の「日本語の歴史的典籍のデータベースの構築—文部科学省による学術研究の大型プロジェクトの推進と関連して—」、岡嶋偉久子氏（天理図書館）の「天理図書館の古典籍目録」、赤間亮氏（立命館大学）の「ARCデジタル化モデルによる新たな挑戦」、榎村雅章氏（慶応義塾大学）の「HUMIプロジェクトによる貴重書デジタル化を振り返って」、アンドリュー＝ガーストル氏（ロンドン大学）の「Researching Shunga—Accessing Private Collections」等々全部で20本以上に及び、それぞれに活発な質疑が交わされました。彼らEAJRSメンバーの多くは、日本古典籍の目録化とデジタル化に大きな関心を寄せていることから、今回は特にモレッティ氏の発案で、上記の日本人研究者10数名を核としてラウンドテーブル「General Discussion on Digitizing and Cataloguing Antiquarian Materials」が持たれました。予定時間を大幅に超過した情熱的な議論は、問題のありかを炙り出して非常に有益だったと思います。

発表の合間には、皆で、ニューカッスル大学図書館をはじめとして、市内のラング＝アートギャラリー（ウブな浮世絵多し）、バスで小1時間ほどの距離にあるダラム市のオリエンタルミュージアムを訪ねました。ダラム大聖堂（映画「ハリーポッター」のロケ地）の威容も深く脳裏に焼き付きました。

わたくしは今回が初めての参加でしたが、ランチでもディナーでも、あるいはまた短いリフレッシュタイムでも、日本の古典籍について、たくさんの方々と大いに語り合いました。彼らの意識と知識はおしなべて高く、当館への期待がたいへんに大きなものであることを実感した次第です。折しも今年度から、EAJRSでは、今西祐一郎館長による「くずし字講習会」が始まっており、今後ますます両者の結びつきが友好的に深まってゆくことを期待しています。（神作研一）



市内遠望 右手がティン・ブリッジ



研究発表 2011年9月8日（於）ニューカッスル大学

イタリアとの日本文学国際共同研究集会

2011年9月14日、ボローニャ大学哲学部4番教室において、第3回日本文学国際共同研究集会が開催されました。今回のテーマは「表現様式と交流」。AISTUGIA（イタリア日本研究集会）との日程連携で行われる当シンポジウムは、国文研がイタリアで学術交流協定を締結している、ヴェネチア大学、ナポリ東洋大学、フィレンツェ大学、ローマ大学及び会場校のボローニャ大学の教員及び大学院生、国文研教員の計約30名が参加し、中堅、若手半々の割合で研究発表を行い、熱心な討議が繰り広げられました。内容は以下の通りです。

- 1, Edoardo Gerlini 「平安文学におけるイペルテキスト性：菅原道真、『源氏物語』、『和漢朗詠集』」
- 2, Aldo Tollini 「中国文字で日本語を書く：「あはれ」をめぐる」
- 3, Mario Talamo 「『膝栗毛』における実用性の表現様式について」
- 4, 武井協三 「役者評判記と遊女評判記の交流—『おもはく哥合』について—」
- 5, Luca Milasi 「鷗外が中国文学から取り入れたモチーフに関する考察—歴史小説『魚玄機』を中心に—」
- 6, Matilde Mastrangelo 「伝説のリライティング：『山椒太夫』における表現様式」
- 7, Gala Follaco 「詩学を成す詩訳—永井荷風『珊瑚集』について」
- 8, Maria Elena Tisi 「神話と民話から現代児童文学へ」
- 9, 山下則子 「見立絵本『見立花づくし』について」

これらの発表は全て日本語で行われ、討議も日本語で交わされました。日本からの参加者にとっては大変有り難い配慮でしたが、現地の学生にはかなりの負担を強いたのではないかと危惧されました。しかし、「日本語での発表は我々にとっては大変勉強になった」というイタリア側参加者の言葉も、あながち気配りのみで寄せられたものではないと推察します。研究集会終了後の懇談会でも、今回発表しなかった学生も交えて、和やかに多くのことを語り合うことができ、更に交流が深められました。

イタリアにおける第1回日本文学国際共同研究集会は2005年9月にフィレンツェで開催され、科研基盤研究(S)「国際コラボレーションによる日本文学研究資料情報の組織化と発信」(研究代表者 安永尚志)の成果の一つでした。国文研側の発表を中心とし、インターネットによる資料の共有と発信を基盤にした内容となりました。第2回は2009年9月にミラノ大学ビコッカ校で「日本の〈笑い〉」をテーマとし、3名の国文研教員、4名のイタリア人日本文学研究者による発表がありましたが、ほとんどが中堅研究者でした。

これらを踏まえての今回の研究集会の特色は、学術交流協定校を中心とする、イタリアの若手日本文学研究者の発表が数多くあったということです。彼らの研究発表に我々も学ぶことができましたし、全ての若手研究者の発表に対して、彼らの努力への当然の配慮として、できる限りのコメントを加えるよう心がけました。終了後にイタリアの教授達から特に若手への指導の面についての謝辞をいただき、来年も是非この形式で研究集会を開催してほしいとの要望がありました。

第4回研究集会はフィレンツェで開催される予定です。イタリアにおける日本文学研究の進展に、国文研が少しでも貢献できれば、これに勝る幸せはありません。(山下則子)



Maria Tisi 教授 司会をする武井副館長



総合研究大学院大学 平成 23 年度入試説明会と特別講義

国文学研究資料館を基盤機関とする総合研究大学院大学日本文学研究専攻は、10月22日(土)に翌年度(平成24年度)の入学試験について説明会を行いました。

本年は10人の参加者があり、日本文学研究専攻及び入試に関する説明があった後、施設案内として院生の研究室、図書室、講義室の見学や現役の院生との懇談が行われました。

また、日本文学研究専攻教授の谷川恵一先生から「^{ちつ}凝と考へる」こと―二葉亭四迷『其面影』における持続のモード―と題した特別講義が行われました。

参加者からは、「大変充実した研究環境だと感じました。普段なかなか入れない書庫の見学、特別展示も案内していただき、とてもありがたかったです。」等の感想が聞かれ、充実した説明会となりました。



入試説明会



特別講義

2月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29			

3月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

4月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

休室日等 お問い合わせは 電話：050-5533-2926 FAX：042-526-8607 <http://www.nijl.ac.jp/>

ゲスナー賞受賞

蘆庵文庫研究会（飯倉洋一・大谷俊太・加藤弓枝・神作研一・盛田帝子・山本和明）の編集にかかる『蘆庵文庫目録と資料』（日本書誌学大系 98 / A5判 802頁 / 青裳堂書店刊 / 2009 / 39, 900円）がこのほど、第6回ゲスナー賞「目録・索引部門」の銀賞を受賞しました。同賞は、スイスの博物学者で「書誌学の父」コンラート・ゲスナー（Konrad Gesner, 1516-1565）に因んで雄松堂書店が創設したものです。

蘆庵文庫は京都東山区にある新日吉神宮に設けられた、小沢蘆庵ゆかりの資料を核とする文庫で、本書は、その目録（1600点余）と主要資料の翻印（文庫の創設者藤島益雄氏の遺稿に基づく）から成っています。

目録の基となった文献調査は、1990年に国文学研究資料館によって開始されたもので、20年に亘る調査の過程や成書に至る経緯などは、大谷俊太氏の「書後」に詳しく記されています。今西祐一郎館長序文。



授賞式 2011年10月28日
（於）明治大学図書館

大谷代表 後方は林望審査委員



表紙絵紹介

江戸図屏風 六曲一双のうち左隻・部分（国立歴史民俗博物館蔵 歴博資料番号 H-5）

江戸を中心とした都市景観を描いた六曲一双の屏風。著色。縦一六二・五匁、横三六五・五匁。胡粉で盛り上げた下地に金箔を貼る。景観年代としては、明暦三年（一六五七）の大火以前のものである。明暦の大火以降、江戸城の天守閣は再建されなかった。本作には天守閣がそびえている。制作年代は諸説あるが、一定した見解にはまだ到達していない。

景観は富士、江戸、鴻巣御殿、川越までを描く。三代将軍徳川家光の事績を顕彰するような場面が多いことが指摘されている。金雲で画面を分割する洛中洛外図的な景観図である。シームレスな景観表現は鍬形蕨斎を俟たねばならなかった。なお、大久保純一氏によれば、源頼朝（徳川氏が祖と称した清和源氏）が中心にいる富士巻狩図の図像的な借用関係も考えられるという。（井田太郎）



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

Tel.050-5533-2910 Fax.042-526-8604

発行日 平成24年1月25日

編集 国文学研究資料館広報出版室

印刷 株式会社アズディップ

©人間文化研究機構国文学研究資料館